

続「さようなら」－クラーク博士

藤原 道夫

前回ラフカディオ・ハーンの「さようなら」を取りあげ、外国人の先生を送る明治の人たちの心情に思いを馳せた。書きながらクラーク博士の場合はどうだったか気になった。

マサチューセッツ農科大学で教鞭をとっていたウィリアム・スミス・クラークは、日本政府の要請により 1876（明治 9 年）創設されたばかりの札幌農学校に教頭として赴任した。仲介の労をとったのがたまたま同じ大学に留学していた新島襄だった。クラーク博士 50 歳の時で契約は 1 年（実質 8 カ月）、化学・動物学を担当した。博士は学校での活動に厳格な基準を作り、またキリスト教の精神を広める。学校生活にカレーライスやコーヒーを導入したのも博士だった。

翌年 5 月帰国する際、生徒たちが見送りに月寒駅通所に集まった。生徒たちはさぞかし先生との別れを惜しんだであろう。残念なことに、その場のことは文章として残されておらず、現場に居た人たちが後日語ったことが言い伝えられているのみ。最後に博士は生徒一人一人と握手し「Boys, be ambitious!」と言ってさっと馬に乗り、林の中に去って行った。何とも格好のよい光景が眼に浮かぶ。この言葉についてはもっと長かったようだし、解釈も様々あるようだ。兎も角、明治初期の生徒たちは鼓舞激励されたに違いない。私は中学校で「富や地位にこだわらずに立派な人間として成長しなさい」と教わった。社会の状況が全く変わり、意欲に欠ける若者たちが多いといわれる昨今、この言葉を日本の Boys に投げかけたらどんな反応が返ってくるだろうか。

クラークはアメリカでは評価されなかったようだ。帰国した後に鉱山事業を興すが、相次ぐ横領と訴訟に疲弊し、心臓病を患い失意のうちに 59 歳の生涯を閉じた。

クラーク自身、日本で過ごした 8 カ月は充実していたと回想していたようだ。農学校二期生に内村鑑三、新渡戸稲造たちが入学し、クラーク先生の精神を間接的ながら学んでゆく。博士の影響は「Boys, be ambitious!」だけに留まってはいない。